

# NIEニュース

エヌ・アイ・イー



Newspaper in Education

第89号  
2017.10.15

●特集・新聞コンクールで育む力▶1~3 ●新聞の「今」―「実名」報道に込める記者の思い/第22回 NIE 全国大会名古屋大会・特別分科会報告/NIE フラッシュニュース/アドバイザー紹介▶4~7 ●〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2017年 日本新聞協会

編集・発行 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp  
〒100-8543 東京都千代田区千代田 2-2-1 日本プレスセンタービル [http://nie.jp] [http://www.facebook.com/Nie47]

## 特集

# 新聞コンクールで育む力

近年、教育委員会や大学が主導して新聞感想文コンクールを実施する動きが全国各地に広がっている。社会で起きている出来事を新聞記事から読み取り、対話を通じて記事に関する自分と他者の考えを共有・深化する活動は、新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」を実現するための具体的な手法と考えられる。新しい時代に求められる能力の育成に向け、コンクール活動が果たす役割や新聞を活用する意義について、各地の事例から考察する。

学習指導要領改訂の議論の出発点となったのは、子供たちの現状や課題についての分析と、子供たちが今後立ち向かうであろう社会の変化の想定であった。

中央教育審議会答申では、前者について、国内外の調査等によりわが国の子供たちの学力が近年改善傾向にあるものの、いくつかの課題が示されている。例えば学力面では、さまざまな調査結果から「学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き



文部科学省  
初等中等教育局視学官  
大滝 一登

出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていく」面での課題が指摘されている。また、スマートフォンなどの利

## 言葉や社会との新たな出会いを生み出す場

用時間が増加する中で視覚的な情報と言葉との結びつきが希薄になり、「知覚した情報の意味を吟味したり、文章の構造や内容を的確に捉えたりしながら読み解くことが少なくなっている」ことなども懸念されている。

一方、後者においては、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展することが想定され、特に

人工知能など情報技術の飛躍的な進化の中で発揮すべき人間の役割が問われることが指摘されている。

こうした状況にあって、文字としての言葉を基盤とし、多様な最新の情報を含み持つ新聞は、子供たちの課題を改善し、社会の激しい変化に対応する資質・能力を育むための教材として大きな可能性を有している

いえよう。授業はもろろんのこと、さまざまな場において新聞を活用した教育活動が行われることが望ましい。

例えば、NIEの一環として行われている多様な新聞コンクールなども、言葉や社会との新たな出会いを生み出す場として有効な取り組みである。新聞コンクールには、子供たちが単に新聞記事を選んで自分の意見や

感想を書くだけでなく、同じ記事を家族や友人などにも読んでもらい、記事について話し合った内容や、話し合った後の自分の意見や感想、提言などを書いて応募するもの、テーマに基づき複数の新聞記事を読んで自分の考えや提案などを書いて応募するものなどがある。

こうした取り組みは、我が国や世界での出来事や社会問題などに広く目を向けさせるとともに、考える機会を与え、さらに考えたことを言葉で表現させたり人とのコミュニケーションを充実させたりするために有意義である。また、社会の変化を見据え、解決を図るために課題を我が事として捉えて思考し、他者と協働していくこれからの教育の理念とも合致するものである。

NIEの多様な取り組みなどを通して、私たちは、人間にしかできない資質・能力を高め、子供たちがこれからの社会を生き抜き、豊かな人生を過ごせるよう、教育の使命を果たす必要がある。

「比べて読む」新聞コンクール

複数紙読み比べて育成する  
思考力・判断力・表現力



東京都北区教育委員会指導主事 清水 みさ

「うちの子は小学校1年生なのですが、『比べて読む』新聞コンクール」に応募したいと言っていて……。1年生でも応募できますか？」

夏季休業中の保護者からの問い合わせだ。

東京都北区教育委員会では、2010年度から「新聞大好きプロジェクト」事業を推進している。この事業の一環として13年度から、「比べて読む」新聞コンクールを開始した。教育委員会と区内の新聞販売同業組合が共催する全国初の取り組みとしてスタートし、今年度で第5回を迎える。

北区在住の児童生徒が、気になった新聞記事の中からテーマ

を決め、そのテーマに関する二つ以上の記事を選び、選んだ理由、共通点や相違点、比べることを通して考えたことや気付いたこと、提案などを書いて応募する。

第1回の応募総数は、3954点だったが、昨年度の第4回では、6609点もの応募があった。年々、応募総数が増加していることから、各学校における新聞活用や本コンクールの広まりが分かる。

第3回のコンクールから、小学校第1学年から第3学年の児童を対象にした賞を新たに設けた。設定初年度は、64点の応募だったが、昨年度（第4回）は、485点と応募数が大幅に増えた。冒頭の保護者からの問い合わせの件に通じるが、低学年からも多くの児童が、進んで新聞を広げ、気になった記事や写真を運び、家族と話をしながら応募

募作品を制作していることは大変、うれしく思う。

先日、区内の小学校の低学年担任が、保護者から「最近、家で子供が『……ってどういうこと？』と、新聞記事の内容について質問してくるようになってきた」という話を聞き、児童の変化を実感したと話していた。

次期学習指導要領のポイントの一つは、「主体的・対話的

「新聞コミュニケーション大賞コンクール」

「対話」の機会を創出し  
主体的な学びを実現



福岡工業大学社会環境学部准教授 中野 美香

近年、グローバル化・情報化などにより社会が大きく変化する中で、高等教育の改革が進んでいる。福岡工業大学では、2012年度新入生から、就業力の構成要素を「志向する力」「共働する力」「解決する力」

深い学び」の実現を通じた授業改善である。自ら新聞を広げ、社会の出来事について考えを深め、それを言葉で表現することは、主体的な学びの姿と言える。また、「比べて読む」新聞コンクール」で取り組んでいる複数の記事の読み比べは、さまざまな角度から物事を考える力の育成につながる。

本区では区内新聞販売同業組

「実践する力」とする、コミュニケーション能力育成を主とした新カリキュラム「就業力育成プログラム」を全学的に体系化した。この中で「共働する力」に力点を置いて議論スキルを養う「コミュニケーション基礎」を中心とした講義において、西日本新聞社との包括的連携協定により14年度から「新聞コミュニケーション大賞コンクール」を導入した。

合の協力を得て、小中学校全ての学年において、いつでも新聞を手にするができる環境づくりに努めている。今後も、社会の出来事や仕組みに関心をもたせるとともに児童生徒の思考力・判断力・表現力・情報活用能力の向上を目指し、「比べて読む」新聞コンクール」の実施、そして、日常的な新聞活用教育を推進していきたい。

このコンクールは、西日本新聞社による90分の出前講義で新聞の読み方について理解を深めた後、自ら興味を持った記事（新聞は問わない）を選び、家族や友達の意見を取材し、話し合いを経て、自分の意見や提案をまとめ応募するというものである。16年度は「新聞コミュニケーション大賞」を含む六つの賞に対し、946編中、24編が表彰され、応募数は年々増加している。

コンクールの意義は、一連の活動を通して自己観・他者観・世界観の広がり期待できる点にあると考える。デビュード・

特集 新聞コンクールで育む力

コルプは経験を生かすための学びのプロセスとして「経験・内省・概念化・実践」という4位相からなる「経験学習モデル」を提案した。このモデルに沿って活動を捉えようと、記事選択においては日々刻々と変化する社会の事実の中から自分自身が何に興味関心があるのか、自己と

対話し、それについて調べ、家族や友人と意見交換・議論する(経験)。これによって他者の視点に気付く、多角的なものの方を獲得し、自分の考え方・パラダイムが再検討・修正される(内省)。そして、他者の意見を踏まえて主張を再構築することを通して自分・他者・世界への

理解が深まり(概念化)、得られた知見を新たな行動で試す(実践)。  
大学生は一人暮らしも多く、「内省」や「概念化」を創発する真剣な対話の仲間が周りにいない場合もある。社会的自己の形成過程において、新聞を用いて前進的な自己改善につながる

主体的な学びを提供することは極めて重要であると考える。  
事後調査によると、実際に多くの学生はコンクールを機に新聞をチェックし、気になった点について友人や家族と議論したり深く調べるようになったと回答した。「これからも続けてもらいたい」という意見も多数あ

り、研究活動に参加するなど、後進の成長の手助けをしてくれる学生もいる。  
認知発達の源泉は日々の他者との対話にあり、新聞コミュニケーション大賞コンクールはその対話の多様性と可能性を広げるコミュニケーション形成に役立つと感じている。

「みんなde読もう!新聞コンクール」

子供たちが考えを深め 社会とつながるきっかけに



市教育委員会 指導員 横手市教育委員会 指導員 学校教育部 指導員 NIEアドバイザー 永沢 敏昭

秋田県横手市では、授業改善の推進による学力向上を目指し、「言語活動の充実」「学校図書館の活用」「NIE」の推進に全市を挙げて取り組んでいる。

今年度は年間8回の「新聞の日」を設定し、市内全ての児童生徒に新聞を読む機会を設けた。各校では授業での活用はもちろ

ん、NIEタイムなどの常時活動とともに、それぞれ工夫を凝らした活用を進め、新聞をより身近なものにしようとしている。このような中で、新聞記事をもとに、友達や家族など意見交流する機会をつくりたいと考えて、今年度初めて、「みんなde読もう!新聞コンクール」を行うことにした。

実施に当たっては全国各地の新聞コンクールを調べた。特に「いっしょに読もう!新聞コンクール」は新聞記事をもとに身

近な人と感想や意見を交流しあって自らの考えを深めるといって点でねらいが本市と重なり、書式など参考にさせてもらった。  
スマートフォンが席巻する時代。今、この時期に新聞を読むに、読めずに育つことに、不

安と危機感をもたずにはいられない。新聞を媒介に、子供たちが考えを交流し合って、広く深く考えながら判断し、社会や人々と関わり、つながりながら生きていく力を身につけてくれることを期待している。

っかり読み込んで、考えをまとめている努力が伝わってきた」との声があるという。  
◇東京都大田区・親子で読もう!新聞コンクール 17年度から実施。大田新聞販売同業組合の主催で同区教育委員会が後援する。区内の小中学校に在学する小学5年生以上の児童生徒が対象。興味を持った記事を読んで気付いたことや考えたことを感想文にまとめる。新聞に親しみ、社会の出来事に興味を持ってもらうとともに、新しい時代に求められる能力の育成も目指す。コンクール担当者は「北区のように、ゆくゆくは区主導のコンクール活動となるよう取り組んでいきたい」としている。

各地で広がる コンクール活動

◇福岡県筑紫野市・「新聞感想文」コンクール 2016年度から同市教委主催で、市内の小中学校を対象に実施。夏休みや日常の課題として、気になる記事を読んで感想や考えを書くコースに加え、国語科等の日ごろの学習と関連した記事を読んだり取り組むコースなど3部門を設

けている。子供たちの読解力・思考力・語彙力を育成し、地域や社会で起きている出来事へ目を向けさせるきっかけを作りたいとのねらいがある。初年度は約4000人が取り組み、校内審査を通過した667件の応募があった。コンクールの手応えについて学校からは「子供たちが新聞を読む機会を確実に確保できた。作品からは、記事をし

り、研究活動に参加するなど、後進の成長の手助けをしてくれる学生もいる。  
認知発達の源泉は日々の他者との対話にあり、新聞コミュニケーション大賞コンクールはその対話の多様性と可能性を広げるコミュニケーション形成に役立つと感じている。

# 新聞の「命」

近年、プライバシーや個人情報保護意識の高まりから、実名で報じることの是非を問われる場面も増えている。新聞が「実名」を伝える意義とは何か。記者の思いを執筆いただいた。

## 「実名」報道に込める記者の思い



本社東京 本部長  
読売新聞 編集局長  
小田中 崇仁

ネット社会が進み、名前や顔写真、自宅住所など個人情報の露出に皆が神経質になっている。しかし、ニュースを伝える立場からは、実名・顔写真が、やはり必要だと確信を深めている。

青森県で、中学2年葛西りまさん（当時13歳）、高校2年大森七海さん（当時17歳）が遺体で見つかり、「いじめ」が原因の自殺と疑われた。当初は匿名で報じられたが、2人の両親は昨年、報道機関に実名と顔写真を公表し、「匿名のまま」娘のことを忘れられるのがつらい「娘の写真を通じていじめの残

酷さを知ってほしい」と訴えた。

昨年7月、相模原市の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が刺殺された事件では、警察は、犠牲者が知的障害者であり、「遺族の強い要望があった」として、全員を匿名で発表した。匿名で発表されても、記者はまず実名を突き止めようとする。犠牲者が「この誰」かがわからなければ、事件の真相に近づけないからだ。

犠牲になった19人には19通りの人生があったはずだ。家族との愛憎も、地域社会での軌跡もあつたかもしれない。私たちは、事件の背景にあるそれぞれの人生を、実名・写真とともに具体的に記事化することでこそ、事件の深刻さと社会が抱える課題を読者に伝えられると信じて取

材している。

重傷を負った尾野一矢さん（44）の父剛志さん（73）と母チキ子さん（76）は、「実名で語ることで被害に遭ったのがどんな人だったかが伝わる」と実名を公表し取材に応じてくれた。「それが障害者差別をなくすきっかけにもなる」との思いからだ。

遺族・家族の切実な声が示すのは、名前とは個人の尊厳そのものだということだ。実名を出してしか伝わらない、それぞれの「生きた証し」が必ずある。私たちは、こうした声をくみ取り、亡くなった人の「無念さ」を伝え続けようと思っている。

### NIE フラッシュニュース

◇小中学校の学習指導要領解説書で新聞活用言及 文部科学省は6月21日、小中学校の次期学習指導要領の解説書を公表した。指導要領に「新聞」の文言が盛り込まれた国語科、社会科を中心に、「新聞」に関する記述が複数の科目・領域で見られた。

国語、社会では、読解力や情報活用能力の育成に向け、新聞を読ませたり、授業で活用したりする内容が盛り込まれた。また、次期学習指導要領が重視している学校での学びと実社会とのつながりを実感させる教育に向け、算数・数学や外国語で社会への関心を持たせるために新聞を活用する記述が新たに入った。

#### ◇全国学力テストの結果公表

小学校6年生、中学校3年生を対象とした2017年度の全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）結果が、8月28日に公表された。正答率と新聞閲読習慣の関係では、例年の調査結果と同様、閲読頻度の高い児童生徒の正答率が、低い児童生徒より高い傾向が示された。新聞を「読まない」と答えた児童生徒の割合は増加しており、閲読習慣のある児童生徒が引き続き減少傾向にあることが示された。

#### ◇NIEサイトに「効果検証のすすめ」掲載

新聞協会NIEサイトでは、実践指定校など新聞活用に取り組む学校向けに「NIEの効果測定検証のす

め」ページを公開している（<http://nie.jp/research/method/>）。NIEの取り組み前後で児童生徒の学力や意識がどのように変化したかを測り、効果を検証するための調査票を掲載している。新聞協会は、学校からの検証結果等の情報提供を随時受け付けている。



●岡山県  
辻田 詔子  
（つじた・しょうこ）  
①岡山県立西大寺高等学校  
②国語  
③5年

④思考力・判断力・表現力等の育成のため、教科書教材との複合的な活用、一つのテーマに関する記事の継続的収集等の実践を行っている。



●滋賀県  
玉井 正  
（たまい・ただし）  
①甲賀市立甲南中学校  
②社会、数学  
③6年

④新聞記事の揭示、読み比べ、新聞社への投稿等に取り組んできた。多面的に物事をとらえ、自分の考えを持つ生徒の育成に努めたい。

NIE 全国大会名古屋大会

第22回NIE全国大会  
名古屋大会

新聞で育つ子供が主役

大会総括

NIEの芽吹きへ 実践共有



中日新聞社  
新聞・教育センター  
副委員長  
山田 伝夫

8月3、4日に開催されたNIE全国大会名古屋大会は、過去最多となる2400人余の参加者に来ていただいた。ノーベル賞受賞者の天野浩名古屋大教授による記念講演や、26に上る分科会を用意したほか、いろいろな試みにも挑戦した。いくつかを紹介し、大会の成果と今後の課題をまとめた。

○台本なし

初日、記念講演に続いての座談会は台本なしで臨んだ。

登壇者は、天野教授、女子レスリングの吉田沙保里選手、弊社の小出宣昭顧問・主筆の大人3人に、いずれも愛知県内に住む高校3年鈴木杏奈さん、小学

5年津山克樹君の児童生徒2人を加えた5人(写真)。大会実行委員長の土屋武志愛知教育大教授に進行役をお願いした。

新聞を読んで育ってきた児童生徒2人が発する問い、受け答えを、そのまま見てもらいたかった。こちらの用意した台本通りでは意味がない。NIEの成果とは、「NIEで育つ子供の姿」そのものはずだから。



座談会「頭の知識 体の知識」

○誰でも発表できる

過去の大会より充実させたの

は展示スペースだ。「NIE交流ひろば」と銘打ち、NIEに取り組んできた東海地方の先生や新聞販売店から希望者を募って、発表場所を提供した。

公開授業や特別分科会はもちろん意義深い。でも、もつと参加者が気軽に発表し合ったり意見交換したりできる場があってもいいのではないか。今回は、併せて10のポスター展示や模擬授業などが行われた。

○新聞社も情報発信を

もう一つ、これまでの大会で少ないと思っただけは、新聞社側から先生たちへの情報発信。

「NIE交流ひろば」には愛知県NIE推進協議会加盟の新聞・通信社による「世界の子供新聞コーナー」を設けた。8社の海外特派員に12の国と地域の子供新聞についてレポートしてもらい、実物の子供新聞とともにパネル展示した。

新聞社による記事検索などのデジタルサービスコーナーも初

めて設け、6社が出展した。

○各校から一人

参加者全体の3分の2の1600人は愛知県内から。県教育委員会や校長会などのおかげだが、とりわけ370余に上る名古屋市立の小中学校には「各校から一人は」とお願いした。

「全校にNIEの『種』が広がる好機に」との狙いだったが、市教委や校長会の理解で、ほぼ達成できた。今後は『種』を芽吹かせる取り組みが必要だ。

○みんなの全国大会

大会運営では、新聞販売店のほか高校生や大学生がスタッフとして働いてくれた。

販売店は約140人、高校生は5校から約80人、大学生は愛知教育大の約40人。分科会の会場準備では大学生をリーダーに高校生たちの連係が光った。大会を取材して号外新聞を発行した高校生、参加者を出迎えるウエルカムボードを児童生徒が手作りしてくれた学校も。

「みんながやった全国大会」だからこそ、NIEが根付くきっかけになったのではないか。

**NIE アドバイザー紹介**

- ① 学校名
- ② 担当教科
- ③ NIE 実践歴
- ④ 新聞を活用するうえでの工夫を一言

(敬称略)



●富山県  
小川 直子  
(おがわ・なおこ)

- ① 富山県西部教育事務所
- ② 小学校全科・家庭科
- ③ 7年

④ 日常的に新聞に触れることができる環境づくりから始める。楽しく、長続きするNIEであるために、必要感のある活動に取り組む。



●富山県  
佐藤 静香  
(さとう・しずか)

- ① 富山県西部教育事務所
- ② 理科
- ③ 9年

④ 継続的に新聞を活用する機会を設け、社会の出来事に関心を高めるとともに、授業を構成する際には、活用の目的を明確にすることが大切である。

特別分科会「学習指導要領改訂を受けた  
NIEカリキュラム」報告

# 人と学びと社会をつなぐカリキュラム

登壇者：文部科学省初等中等教育局 樋口 雅夫 教科調査官  
 愛知教育大学附属名古屋小学校 伊藤 昭良 教諭  
 広島県三原市立糸崎小学校 宮里 洋司 教頭  
 中日新聞社 林 敦郎 NIEコーディネーター  
 コーディネーター：福山大学 小原 友行 教授



愛知教育大学附属  
名古屋小学校 教諭  
伊藤 昭良

学習指導要領改訂に伴い、NIEで育てようとしている力の明確化が課題となる。樋口調査官には、今後のNIEカリキュラムの方向性について話してもらった。その中でも、「18歳選挙権が施行され、今後さらに、子供たちに主権者として参画してほしい。そのためにNIEをカリキュラム化し、新聞で教科を横断的につなげることで、子供たちにさまざまな学習で身につけたことを関連づけて考える力を養い、深い学びを実現していくことができる」という言葉が印象に残った。

宮里先生が発表したNIEカリキュラムのキーワードは「つなぐ」。教科だけでなく、子供・教師・保護者・地域・社会を「つなぐ」のがNIEカリキュラムだ。学校の実態に応じて作成したことにより、めざす子供の育成に向けて、学校全体で日常的・体系的にNIEに取り組んだり、地域や保護者の協力を得ながら社会とかわる機会をもたせたりすることができているように感じた。

中日の林コーディネーターは新聞社が作るNIEカリキュラムを提案した。学習指導要領改訂を受け、「学習の基盤となる資質能力」を育む教科横断的なカリキュラムを作成した。

私はその提案を受けて実践した「社会科・ごみのしよりと利用」を発表した。新聞が、社会的現象と生活を関連づけて考える力、情報を整理・比較し、情報発信の内容を判断する力を育むために有効であることを実感することができた。

用」を発表した。新聞が、社会的現象と生活を関連づけて考える力、情報を整理・比較し、情報発信の内容を判断する力を育むために有効であることを実感することができた。

をつなげ、さらには子供たちの学びをつなげる。そして、子供たちはその学びを人生につなげていける。NIEをカリキュラム化することは、子供たちが新たな価値を創り上げるヒントとなるであろう。

## 特別分科会「新聞切り抜き作品の教育効果検証」報告

# 人生を切り拓く手助けに

登壇者：愛知教育大学 梅田 恭子 准教授  
 名古屋市立志段味中学校 伊藤 達也 教諭  
 岐阜県山県市立富岡小学校 奥田 宣子 教諭  
 新聞切り抜き作品の経験者（大学生）  
 コーディネーター：日本新聞協会 関口 修司 NIEコーディネーター



愛知教育大学  
准教授  
梅田 恭子

本分科会ではまず、中日新聞社の教育効果検証委員会が新聞切り抜き作品活動（テーマを決め、記事を収集・分類し、まとめを書く活動）の効果について検証した結果を報告した。

動のプロセスを可視化することとした。これにより、この活動が情報活用能力を育むだけでなく、「テーマに対しての問題点や自分たちの夢や希望を書く」ようになることを目指していることを確認した。その上で、活動の効果として、総合的な学習の時間で目指す資質や能力および態度をさまざまな視点から育成されることが明らかになったことを指摘した。

ではどのような活動を通して前述の学習目標が達成されているかについて、具体的な子供の成長や変化を踏まえた報告があった。また伊藤教諭からは、スクリップや、その発展的な取り組みである新聞切り抜き作品活動の評価方法について報告がなされた。最後に活動の経験者（現在は大学生）から、「学校では実感できない社会を学ぶことにわくわくしたし、経験が今の自分に役立っている」との発表があった。

報告に共通するのは、新聞切り抜き作品活動は、新聞を使った日常的な活動の上に効果が得られることである。そうすれば「教科書に書かれていることに続きがあることを知る」「記事から生徒自身が考えたことを当事者に発信する」「将来の夢を持つ」など、教室だけでは完結しない社会とのつながりを持つ活動となる。まさに新聞を開くことが世界をひらき、子供たちが人生を切り拓いていくために役立つ活動になり得ることが明らかになったのではないかと

NIE 全国大会名古屋大会

特別分科会 「情報活用能力を育てる 学校図書館活動とNIE」報告  
学力向上への相乗効果を確認

登壇者：刈谷市立衣浦小学校 河村 智美 教諭  
静岡県磐田市立城山中学校 萩田 純子 司書教諭  
横浜市立緑園東小学校 副島 江理子 校長  
中日新聞社 飯尾 歩 論説委員  
コーディネーター：立命館大学 柳澤 伸司 教授



静岡県磐田市立城山中学校 司書教諭 萩田 純子

今回、本分科会に参加する機会を得て、司書教諭としての立場から、長年感じてきた情報活用能力を系統的、横断的に指導して育てる必要性と、そのために新聞資料の果たす役割の重要性を実践とともに述べた。登壇した河村教諭は、新聞の題字のデザインに注目させることで、子供の興味・関心と意欲を引き出して調べ学習を行い、「都道府県ケンシNSHOW」を開催したことを報告。さらに調べた都道府県についてのかるたを作成したり、朝読書で調べた都道府県の民話を読んだりする学習

を展開し、学びを深めていったという。副島校長は、新聞に対する興味・関心を深め、学習に活用することが学力向上にもつながると考え、学校司書が中心となり新聞資料を整備し、子供たちが新聞に親しむさまざまな工夫を実践していた。

これらの発表を聞き、学校図書館の発展とNIEの発展は関連していることを感じるとともに、NIEが学力向上に寄与することに意を強くすることができた。新聞は、今、社会で起きている事実が載っているという点で重要な資料となり、生徒の興味関心を引きつける。また、社説やコラムには意見が載っているという点で、自分の見方や考え方を広げることによって、そのための、学校図書館活動

とNIEは互いに必要とし合っている。

ただ、会場から指摘があった通り、新聞を校費で購入しているところは少なく、十分に配置されているとは言い難い。飯尾論説委員は、学校に新聞を届け

る手段を考えることが課題の一つと述べた。わたしも、司書教諭として孤軍奮闘するのではなく、校内で理解者を増やしたり、関係機関へ働きかけたりすることで、活動の発展を図っていきたい。

特別分科会 「地域で支えるNIE 販売店との連携を考える」報告  
NIEの魅力伝え 学校と新聞社の架け橋に

登壇者：中日新聞扶桑東専売店 高瀬 成就 代表取締役  
両藤舎 佐藤 円一郎 代表取締役  
瀬谷新聞店 瀬谷 一世 代表取締役  
岐阜市立藍川東中学校 神谷 俊行 校長  
コーディネーター：浜松市立与進北小学校 山崎 章成 教諭



浜松市立与進北小学校 教諭 NIEアドバイザー 山崎 章成

「NIEは30年以上の歴史がありながら、多くの先生は『エヌ・アイ・イー』の読み方すら知らない。このままでは新聞離れを食い止められない。学校と新聞社をつなぐ販売店だからこそできることはないか考え、取り組んだ実践例を報告する」

分科会の最初に登壇した販売店主の第一声。参加者は、新聞社と販売店の関係者がそれぞれ5割近くを占め、販売店の危機意識と熱意を感じた。

登壇した販売店からは、学校への出前授業のノウハウを確立して地域で広めている試み、「しんぶんのうた」を作り新聞の存在を幼児の頃から知らせる試み、子供を対象とした講座を5年にわたって続けている試みが紹介された。学校からは、新

聞に記事が掲載され、教育活動の活性化と地域の信頼を得るために役立っていることが報告された。販売店が行う出前授業のメニューが20以上あり、指導できる販売店を増やすために研修を重ねている実践は、多くの販売店にとって刺激になった。新たな読者を開拓し、NIEの魅力を伝える「しんぶんのうた」や講座の実施も各販売店でアレンジして取り組める可能性がある。今までの全国大会では、成果や課題を発表する要素が強かったが、本分科会は新聞社や販売店、教師が今後何をすべきかを意識する機会となった。販売店は地域の実情に合った方法で新聞の良さ、NIEの魅力を継続的に働きかけたい。教師は販売店が貴重な教育資源であることと理解したい。両者の連携の成功事例を新聞社が紙面化すれば、実践の輪は広がるに違いない。NIEアドバイザーとしては、新聞活用のあり方に重点を置いてきたが、新聞社と販売店、教育現場をコーディネートする役割を担う必要性を強く感じた。



三庄小学校は、徳島県NIE推進協議会の独自認定校を経て、

2016年度より実践指定校となり2年目を迎えている。新聞が子供たちにとって身近になるとともに、「新しく、いろいろな情報を知ることができる」「自分たちの学習や生活に役に立つ」と、子供たちは新聞の良さを認識している。朝の放送で、報道委員会が「今日の記事」を紹介するなど、活用の幅も広がっている。

低学年は、新聞に親しむことに重きを置いているが、文字を習い始めたばかりの子供たちに

### 事務局長から一言

三庄小学校の活動は5年目を迎えた。全学年で多彩な実践を重ねる一方、地域・家庭との連携を生かし、特色ある取り組み

とっては、活字にあふれる新聞は、それでもハードルが高い。そこで、本校では、高学年による新聞の読み聞かせを行っている。低学年が、興味をもち、読

## 東みよし町立三庄小学校

教諭 木村 麻紀子

◎徳島県三好郡東みよし町／校長・堤 広幸／児童数・170人  
◎特色・三庄小学校のある東みよし町は、四国の中央に位置し、北に吉野川、南に四国山地に囲まれ、自然が豊かな町である。児童は素直で、純朴。2017年度は、11月に開催される四国国語教育研究大会に向け、取り組みを進めている。



毎月、新聞の読み聞かせで学年を超えて交流する



新聞記事を題材に投書に挑戦する6年生

んでほしい記事を選び、高学年は、辞書で意味を調べたり、低学年が分かる簡単な言葉に言い換えたりして読み聞かせをする。中には要約をして分かりやすく

説明する子供もいる。一対一の読み聞かせであるが、読み終わって新聞記事を囲んで会話が生まれる場合もあり、和やかな雰囲気にも包まれる。

中学年や高学年は、新聞を作ったり、新聞に投書したりして、情報発信に挑戦している。「新聞作り」では、読んでくれる相手を意識して、情報を精査し、何度も書き直すことによって自分の考えや思いを深めることができた。「投書」では、実生活の問題に向き合い、多様な意見や対立する意見を読み取って判断し、自分の考えを効果的に表現する力が付いてきている。今後、新聞に親しませるとともに、さまざまな情報を読み解き、自分なりの意見や考えを持つよう、新聞の活用方法を創造していきたい。

を行ってきた。

地域住民による「新聞応援隊」（2014年発足）もその一つだ。隊員が学校を訪れ、児童に新聞記事を読み聞かせたり、記事をテーマに話し合ったりし

ながら学びを支援。新聞との距離が縮まり、社会に関心を寄せる児童が増えたという。家庭との連携では、家族と新聞や本を

読む「家庭読書の日」を設定。ファミリーフォーカスのきつ

けづくりに力を入れてきた。

11月の四国国語教育研究大会では、こうした活動の成果が徳島から発信される。楽しみだ。（徳島県NIE推進協議会事務局長・井上雅史）



新聞記事の特徴を教員に講義する機会があった。受講者の一人に感想を聞いたところ、「大

事なことから書く『逆三角形』の原則を初めて学び、目からうろこが落ちた気分」◆講義は教員免許更新講習「新聞活用のおススメ」の一コマとして行った。「目からうろこ」の先生、見出しを含む新聞記事に対しさらに「吟味した言葉が載っている。魅力的な教材」と有用性を痛感した様子だった◆新聞記事の書き方については、学生への講義を大学教授から頼まれたことがある。「端的に結論を伝える書き方は就職試験やプレゼンに役立つ」という◆文章構成では頭括弧に分類される「逆三角形」。満載する新聞は日々届けられ、読者も慣れ親しんでいる。学習指導要領を持ち出さずとも、「起承転結」などに並ぶスタンダードな構成として認知、確立されていると感じている。

（山形新聞社・保科裕之）